告白の行方

kick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
告白の行方

【Ｎコード】
Ｎ４６２１Ｂ

【作者名】
ｋｉｃｋ

【あらすじ】
彼と別れたの。そう言われても、僕はどうしたらいいのだろうか。

「だって、薬指に指輪をしてなかったのよ。私、だまされてたのよ。・・・でも本当は最初から気づいていたんだけど。」
彼女はうつむきながら僕に別れ話の詳細を話す。
彼がどれだけ彼女を大事に扱っていたか、彼女が彼の事をどれだけ好きだったか、そして今どれだけ傷ついているか。
客のまばらなカフェで僕たち二人は、まるで別れ話をしているカップルのように見えるだろう。うつむきながら涙ぐむ彼女。そっけない相槌を打つ僕。

彼女の言葉はずっと別れた彼氏を責めている。でも僕がそれに同調して彼の事を責めたら、彼女はきっと彼をフォローするだろうから、僕は何も言わずに聞いている。
時折訪れる沈黙は、彼女が何かを思い出しているとき。
そしてふっとまた涙ぐむ。僕は窓のほうを向く。僕なんかここに居ないみたいだ。
くやしいから僕は、どうしたの?なんて聞かない。

また沈黙だ。今日も空が青いなぁなんて考えてみたりする。
ふと彼女の指先に目を落とすと、彼女はぎゅっとこぶしを握った。
長い沈黙のあと、彼女は言った。
「私、結局都合のいい女だったのかな。会いたいときだけ会って。偽善の愛情をそそいでさ。」
「さあね・・。」
今までの会話と同様に、僕はそっけない相槌を打った。
すべてを失ったかのように思えている彼女は、今はきっと辛いだろうけれど、それでもはっきりとした結果の前に小さな灯りが見えているだろうと思う。

「僕は都合のいい男かい？愚痴を言いたい時だけ会って。僕はそこに愛があるんじゃないかって思っちゃうんだよ。」

そう言ってやりたいけど、まだ言えない僕よりは、ずっと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4621b/

告白の行方

2010年12月2日12時09分発行